ほない歴史通信
第１１５号
2025（令和７）.6.1

「大子開拓」　―　満洲から行方へ（一）

今年で戦後八十年。戦争体験者の記憶を直接聴くことのできる機会が少なくなってきている。大子町の満洲分村移民も、戦争に関わる重要な記憶の一つであり、平成十三年には、遊史の会（当時）の吉成英文氏らが、北浦町（現行方市）の次木（なみき）、両宿、小貫地区を訪問し、引揚者から聴き取りを行っている。その経過が、本誌第十九号の「春の北浦町訪問記」で報告されているが、その中で吉成氏は、「生きるための究極の苦労は武田村（旧北浦町、現行方市）に開拓のため入植してからだった。」との話を引揚者から聴き、「私にとって最もショックな言葉であった。」と記している。では、戦後開拓に入植した引揚者の「究極の苦労」とは、どのようなものであったのだろうか。入植当時の資料は多くないが、資料を紹介しながら、当時の状況を再構成してみたい。

まず、当事者の証言として、佐藤充の昭和五十五年頃の回想がある（『茨城県の農業会回顧録』）。佐藤は「満洲時代から世話人のような役目」をしていた。開拓団の農事指導員であった斉藤良治『開拓の記録』によると、佐藤は、「団庶務係、三十五歳（昭和二十年当時か。筆者註）、本籍地・栃木県那須郡須賀川村、召集・帰国」とされている。なお、佐藤は、後年、入植者の全県的組織である、茨城県開拓民自興会や茨城県開拓農業協同組合連合会の設立発起人にもなっている（『茨城県開拓十年史』）。

回想は、「私は現在の大子町から大子義合という満洲への分村者です。」から始まっている。「大子義合」とは、大子義合開拓農業協同組合のことで、同組合は、武蔵野原大子と義合の二つの開拓帰農組合が統合されたものである（『茨城県史料　農地改革編』）。開拓帰農組合とは、入植者の申合せによる任意組合である。大子町の引揚者が組織したのは前者で、後者は、大子町と同じ第九次開拓団で、竜江省甘南県に入植した義合開拓団の引揚者が組織したものである。なお、義合開拓団は分村ではなく、県内外からの入植である。二つの組合は、農業協同組合法の施行（昭和二十二年）を受け、昭和二十四年までに統合、法人化されたものと思われる（昭和二十四年度『開拓地組合別営農状況』）。

佐藤は、現地召集後、台湾で終戦を迎え、開拓団よりも早く帰還していた。開拓団が、昭和二十一年八月に帰還したので、「これからどうするかと相談の結果、一応生まれ故郷の大子に帰りましたが、あの当時のことですから食糧不足で一ヵ月ももちませんでした」。帰還した開拓団は九十七人（『満洲開拓史』）、このうち、戦後開拓に入植したのは、佐藤によると十七家族、四十五人であったという。大子義合に統合後の構成員（昭和二十六年）を見ると、二十七世帯、百四人。性別は、男性四十七人、女性五十七人。年齢別では、十九歳以下が五十人、このうち十四歳以下が四十一人を占めていた（『開拓地営農実績調査集計』）。食糧難や経済の混乱の中、年少者が多い家族を養いながらの戦後開拓の始まりであった。

大子町満洲分村移民については、本誌において、吉成氏のほか、小澤圀彦氏（第四、三十一号）、斎藤典生氏（第四十九、五十、五十二、五十三、五十五、五十六、五十七、五十九号）、清水延子氏（第五十号）が紹介している。本稿はその続編である。（続）

追記　四月から研究員を拝命しました。よろしくお願いいたします。

（小松崎研）

『ほない歴史通信』はこうして始まった

―創刊号から関わった一編集人の回想―

齋藤典生

新年度に入り、手帳の四月欄を見る。「大子作業日」の五文字がどこにもない。五月を見ても同じ。そうだ、大子町歴史資料調査研究員は三月末をもって退任したんだ、大子町へ行く必要はないんだ、と改めて思う。昭和五六年（一九八一）五月から大子町史編さん専門委員として関わり始めて以来の四三年間、大子町は歴史調査研究の仕事場であり、多くの方との交流の場であり、また諸所を見聞し、食を味わう楽しみの場でもあった。少なくも月一回は大子へ行くことが習慣化していたため、それがなくなった今、いささかの喪失感とともに寂寥感があることは否めない。

その私にとって、何より思い出深い仕事の一つが『ほない歴史通信』を創刊したことであり、編集、執筆に携わってきたことである。創刊から丸二八年がたち、今号は一一五号目となる。多くの執筆者、読者、そして町当局からの強力な支えがあったからこその結果だが、正直、よく続いたものだと思う。それだけに、創刊時のあれこれが忘れられない。その一端を記してみよう。

多くの資料集や通史編二冊を刊行して町史編さん事業が完了したのは、平成五年（一九九三）八月のことである。しかしすべてが終わったわけではなく、執筆に利用した膨大な数の資料を整理する仕事が残った。町役場所蔵の文書、さらに個人所蔵の借用文書、区有文書、コピー資料等を一点一点点検し、既成の目録と照合し、目録のないものは新たに目録を作成する地味だが、大事な作業。これには小澤圀彦さん、石井喜志夫さん、野内正美さん、私齋藤、事務局として井上和司さんの五名が当たった。約四年間にわたり、ほぼ毎月一回、根気のいるこの作業を続けた。

資料整理に目処が付きかけた平成八年八月、私は、「今後の作業課題」をまとめ、会議で提案した。課題の一つに、「歴史をテーマにしたミニコミ紙・情報紙の発行」をあげた。資料整理の仕事を進めるなかで、貴重な資料の散逸をどうしたら防げるか、歴史資料に対する町民の皆さんの認識をいかに深めてもらうか、さらにその歴史資料を活かした個性ある町づくりへつなぐにはどうしたらいいだろうか、こうした問題意識をもつに至ったからである。これが「ミニコミ紙・情報紙発行」を提案する動機でもあった。会議では、小澤さんをはじめ他のメンバーが私の意図を理解し、積極的に賛同してくれたことを覚えている。

直ちに冊子づくりの具体的な検討に入った。次第にイメージが固まっていく。冊子名は、一六世紀頃から使われていた大子地方の古い呼び名「保内」を平仮名で表わした『ほない歴史通信』に、題字の揮毫は、書家であり当時は社会教育課長であった大森政夫（藤軒）さんに依頼、発行は年四回の季刊とし、用紙の色を季節に合わせて変える、体裁はＢ４判一枚の裏表四頁立て、等々。当時ワープロが普及していたので、各人がワープロで仕上げた原稿を持ち寄り、頁を整え、奥付には前記五名の名前を記した。こうして原版を作り、中央公民館の印刷機で印刷し、分担して半分に折った。提案から四カ月後の一二月一日付で、手づくり感あふれる創刊号ができあがった。「生まれたばかりのささやかなこの通信がこれから少しずつ成長していけますよう、皆様からの御助言を心からお待ち申し上げます」、と記した同月三日付の挨拶状を添えて関係者に配布した。わずか四頁という小さな冊子の誕生である。

ボランティア的な形で始まった本誌だが、第六三号（平成二四年六月）を機に、発行者は大子町教育委員会へ、判型はＡ４判八頁立てへ、配布は町内全世帯へ回覧するという仕組みへ変わった。今後も充実度を高めながらどのように変化、成長していくか、楽しみである。これからの歩みを見守りたい。

（水戸市在住）

大子における内田熊蔵の足跡（その三）

内田正人

熊蔵が「久慈郡大子尋常高等小学校」に赴任した後、小学校の罫紙を用い「大子町郷土誌」を書いている。彼は、郷土史と書いた題名を郷土誌と書き替えていた。始めに地図が三枚描かれており、一枚目は「京都将軍李世之図」、二枚目が「保内郷略図」、三枚目が、「大子町の中心部の図」である。

その目次には、第一 位置及境域、第二 面積・人口、第三 起源、第四 沿革、第五 神社、第六 寺院、第七 名勝舊蹟、第八 大子金山、第九 久慈川橋、第十 官衙學校、第十一 人物傳、第十二 物産及土地段別税金額の十二項目が記され、末尾には、「明治四十一年五月調」とあり、熊蔵赴任の二年後にまとめられている。彼が大子町について大変興味を抱いていたことが分かる内容である。

【保内郷略図】

「第四 沿革」には、「…本区（大子区※筆者註）ハ保内郷ノ中央ニ位置シ、各地ヘ交通ノ衝ニ當ルヲ以テ、古来物産ノ集散場トシテ本縣北部ノ一都邑タリ、且ツ勧業ニ教育ニ兵事ニ地方集會ヲ開クヤ必ズ本區ニ於テス、加フルニ近年保内各村ノ生産力益々増加スルヲ以テ、商況日ヲ追ツテ盛大ニ赴キ區有ノ財産亦年ト共ニ増殖ス、嗚呼本區ノ前途愈多望ナル哉」とある。

また、大子尋常高等小学校の所在地にあった「大子文武舘趾」について、「字後ロ山ニ在リ享和二年（或ハ文化ノ始メニ作ル）水藩郡宰ノ舘ヲ置キシ所ニシテ、天保二年之ヲ廢シ暫ク空舘トナリシガ、安政元年八月郷校（世人呼デ文武舘ト云フ）ヲ此処ニ置キ、文筵武場ヲ開キ、文庫ヲ建テ、矢場、馬場等ヲ設ケ舘守ヲ置キ、水藩ヨリ教師ヲ派遣セラレシガ、明治元年祝融ノ災ニ罹リテ再築セリ、明治五年學制ヲ發布セラルルヤ、本舘ヲ以テ小學校舎ニ充用セリ、明治廿三年再ビ祝融ノ災ニ罹リ文庫ヲ除クノ外總テ烏有ニ帰ス、現時ノ校舎ハ舘趾ニ建築セラレタルモノナリ」とある。

「官衙學校」の項には、「大子尋常高等小學校、字後ロ山旧學館趾ニアリ、現時八學級ノ編成ナリ、本年ノ學齢人員男二百十六人、女二百五人、就學歩合ハ男九十九人（ママ）五分四厘、女九十九人（ママ）五分一厘、四十一年度ノ教育費一千六百八十圓八十六銭ナリ（コハ大子尋常高等小學校費ノミナリ）」（傍線は筆者）とある。就学歩合とは就学割合であるから、男女共に、ほぼ百パーセントに近い児童数であり、八学年ある学校で一学年に五十人を越える児童がいたことがうかがえる。

さらに、明治四十一年（一九〇八）に、大子町が千六百八十円八十六銭の教育費をこの尋常高等小学校にかけていたが、「第十二物産及土地段別税金額」の項には、国税五千二百十一円六十八銭五厘、県税千六百五十円九十一銭五厘、町村税二千五百九十円五十七銭七厘とあり、大子町の約九千五百円の税収の中で、二割近い額を教育費に当てていることも、子供の教育にいかに力を入れていたことの証明であろう。なお、この「大子町郷土誌」の詳細は、『大子郷土史研究』第五号（平成三十年十二月二十五日発行）に載せているので、参照していただければ幸いである。（日立市在住）

あの頃に寄り添う移住の選択

比留間れみ

はじめまして、比留間れみと申します。現在、商店街の金町通りでパンと菓子の店『Michiru Bakery』（ミチルベーカリー）を営んでいます。私は、神奈川県出身で、高校で調理師免許を、短大で栄養士と栄養教諭の免許を取得しました。社員食堂や料理教室の講師を経験し、結婚後にパン教室に通い始めました。幼い頃から母や祖母と台所に立つ機会が多く、できあがった料理を喜んでもらえる経験があってのことでした。

私にとって、大子町は母方の祖父母が住む町です。幼い頃は家族で長期休みの度に泊まったり、母の入院の際には一人で祖父母の家に預けられたことも二度ありました。夏頃と冬頃の記憶があり、夏は裏の畑でトマトやきゅうりを食べ、家の前を流れる川で遊び、夜には祖父と蛍を見に田んぼまで出かけました。冬は年末年始の準備で祖母が忙しくなり、常にお客様のおもてなしに追われる姿、具沢山のけんちん汁のつけ麺スタイルの年越しそばを覚えています。夏でも冬でも、美味しい温かいお茶をみんなで飲むのも、祖父母の家ならではの姿でした。いつか大子町に住みたい気持ちを持っていましたが、便利な環境で育った私には大子町移住は思ったよりハードルが高く、何から手をつけるべきか分からず、その間に結婚、出産を経験しました。

意を決して行動を始めたのは二〇一九年の春、Instagramにハッシュタグをつけて投稿を始めました。「#大子町」「#移住」と投稿すると、大子町に住んでいる人からダイレクトメッセージを頂き、そこから繋がりが増えていきました。その後、台風による災害やコロナもあり、すぐに行動することはできませんでしたが、その間に車の免許を取得、車の購入、住まい探しを進め、二〇二一年一月に移住しました。ミチルベーカリーは、同年一二月に開店しました。Instagramで移住前に繋がった方々や、移住後にお店を開店したい私の気持ちに賛同してくださった商店街の大工さんのお力添えがあり、実現したものでした。その後、私の両親も移住し、お店を一緒に支えてもらっています。ミチルベーカリーのミチルは、よく私の名前と思われる方が多いのですが、動詞の『満ちる』から来ています。満たされることで笑顔になってもらいたいという願いを込めました。

移住を検討していた時、よく大子町のホームページで情報を集めていました。そこで初めて特産品の多さを知り、食の道に携わってきた私にも特産品を使って町外の人に大子町の良さを伝えることができるのではと思いました。そこで、ミチルベーカリー開店後は、イベント出店を積極的に行い、町外に特産品を使った商品をお届けし、農家さんの想いを私が売り手として伝えることを大事にしています。

大子町に移住し、多くの人と繋がることができ、私の人生はより豊かになりました。三人の子供達には不便をかけてしまっていますが、多くの人との繋がりや私が日々お店を営む姿を見て、大人になった時、何か感じてもらえたらと思います。少しずつ町内で販売する機会も頂けるようになり、より多くの方に満ち溢れる気持ちをお届けできるよう模索しています。今後ともどうぞよろしくお願いします。

（大子町大子在住）

Michiru Bakery
所 在 地：大子町大子 618-5
営 業 日：木・金・土・日曜日
営業時間：10:00～18:00

高部宿と養浩園

非営利活動法人美和の森　石井聖子

常陸大宮市美和地域の高部は、大子町栃原と接する山村です。主要街道の交差する地にある高部宿は、木材・葉煙草・紙・楮等、水戸藩領内北西部の特産品の集積地として江戸時代より栄え、この地域の中心として今日まで続き、小規模ながら、和洋折衷の趣きある町並みが残っています。

幕末、高部宿には三軒もの郷士が軒を連ねており、いずれも江戸の著名な紙問屋と取引する、水戸藩公許の紙問屋でした。奥久慈地域が楮の栽培に適していたことから、紙は藩の財政の三分の一を支える重要な特産品となりました。水戸藩領で産するにも関わらず、当地産の楮が「那須楮」と呼ばれる理由は不明でしたが、利根川東遷以降、当地の紙産出量が大幅に増えていること、当地の紙問屋の多くが那須烏山城下に出店を持ち、江戸商人と取引をしていることなどから、当地産の紙や楮の多くが、栃木県那須地域に陸送され、東遷により利根川と直結した鬼怒川水運を使って江戸に移送されたため、那須方面から下ってくる物品として「那須紙」「那須楮」という流通名が定着したと考えられます。

北への道は、栃原に隣接する最良質の楮の産地大沢につながり、周辺に多くの紙漉き村を持つ高部は、鷲子とともに栃木県へ紙と楮を陸送するための拠点として繁栄し、和紙産業が衰退する近代になっても、森林資源や近世からの蓄財をもとに、郵政・酒造・運輸等に進出して繁栄を維持し、現在見ることのできる独特の町並みを形成しました。

養浩園は、近世後期に紙問屋として成長し、近代は酒造業を営んだ岡山家の庭園で、付属する喜雨亭とともに、明治時代初期から整備されたと考えられます。園地の南を流れる緒川に、北からの和田川が合流する地点を南東の角とした約三〇〇〇㎡に池と遣り水を配しており、樹齢百年を超える針葉樹、ツツジやカエデ等の落葉樹、そして苔が、深山のような清閑さをたたえています。

当時の岡山家の当主は、養浩園と喜雨亭を、水戸の偕楽園と好文亭に模して整備したと伝えられ、三階建ての喜雨亭の一・二階部分は庭を賞でるよう開放的に造られていました。どちらも国登録の記念物と有形文化財になっており、養浩園は冬季を除く毎月第三土曜日、喜雨亭は四月のシロヤシオツツジ開花期と十一月の紅葉期の土・日曜各二日間、一般に特別公開しています。

これらの貴重な文化財は、高部地区や美和地域だけでなく、大子町域も含む広域の人々の営みがあってこそ生み出されたと言うことができましょう。支えあって同じ文化圏を作ってきた私たちは、自治体の垣根を越えて、様々な分野で積極的に協力していきたいものです。

（常陸大宮市在住）

喜雨亭

紅葉の養浩園

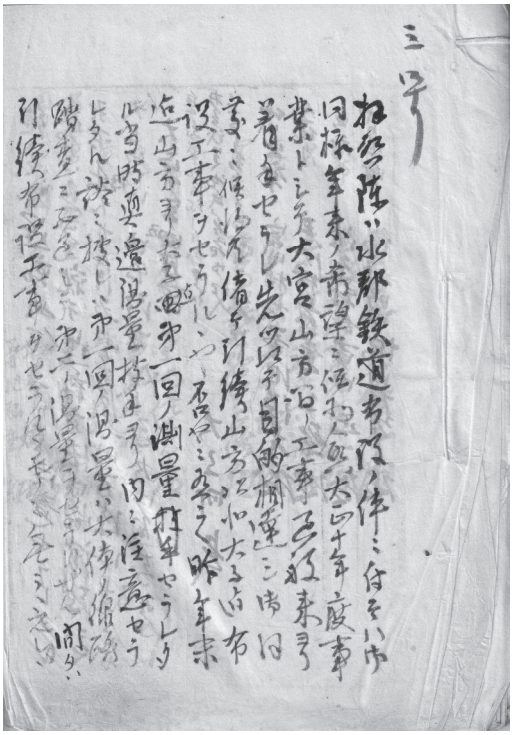
新発見！益子彦五郎関係史料

このほど、とある古書店で販売されていた古文書に目が留まり、これを購入した。内容を確認したところ、古文書に残る筆跡が益子彦五郎の筆跡に似ており、なおかつ益子発信文書の控えが多数綴られていた。このことから、この古文書は、益子彦五郎関係史料であることが判明した。

益子彦五郎（一八五〇～一九二七）は、明治後期から大正期に大子町長を約二十六年にわたり務め、数多くの事績を残した人物として知られている。また、益子は、「最近大子記事幷ニ余町長ノ事績」をはじめとする多数の記録を遺したことでも知られている。益子が遺した記録は、大子町史編さん時に活用され、一部は写しがとられた。現在、写しは大子町教育委員会が保管しているが、原本は所在が分からなくなっている。

このほど入手した益子彦五郎関係史料は、文書綴り一点と冊子二点の計三点である。

文書綴りは、水郡線誘致運動に関する文書がこよりで綴じられたものである。分量は、頁数にして八十二頁である。文書の日付は、最も古いものが大正十年（一九二一）五月一日付け、最も新しいものが同十一年二月十三日付けである。文書の大半は、大子町役場十一行罫紙に書かれている。内容は、主として益子（大子町長）が誘致運動に関連して発出した通知及び請願書の控えである。また、誘致運動の経過を日記のように記述した文書も所々に見られる。表題と思しき記載は見られないが、一頁目の右上に「三号」という記載が見られる。益子が遺した記録のうち、主として町長在職中の事績を記録した「最近大子記事幷ニ余町長ノ事績」は「第一号」、大子農学校の県立移管の経過を記録した「農学校県立移管雑記」は「最近大子記事第二号」という号数が付されていることから、本史料は、これら二点に続く三点目として益子が作成したものと考えられる。管見の限り、新発見の史料である。数少ない誘致運動に関する一次史料であり、誘致運動の実態が明らかになることが期待される。



水郡線誘致運動関係文書綴り

一点目の冊子は、表紙に「大子袋田間久慈川架橋計画　益子町長」と書かれている。分量は、表紙及び裏表紙を除き、四十四頁である。裏表紙に「引継書」と題された文書がこよりで綴じ込まれている。本文は、大子町役場十二行罫紙が使用されている。内容は、久慈川橋（明治三十六年（一九〇三）架橋）の架橋に至るまでの経過、架橋に係る寄付金額及び寄付者氏名などである。本史料は、写しが大子町教育委員会で保管されている。

二点目の冊子は、表紙に「岡本葛久保間潜橋架設寄付台帳」と書かれている。分量は、表紙及び裏表紙を除き、四十六頁である。各頁に寄付者氏名と寄付金額が記載され、末尾に「寄付金計七百九拾四円参拾銭」と記載されている。日付は、記載されていない。岡本葛久保間潜橋は、現在の長岡橋に相当する橋と思われる。管見の限り、新発見の史料である。

本稿では、史料三点の概要を紹介するに留まるが、今後は、史料を読解し、その成果を報告することとしたい。　（大金祐介）

【保内衆の戦国時代(4)】

保内衆を統括した佐竹南家

戦国時代に入る頃、現大子町域にあたる依上保は白川氏の所領でした。しかし、永正七年（一五一〇）に佐竹氏が進出し、その後内紛による勢力交代を経つつも、天文五年（一五三六）には佐竹氏が依上保（保内）を掌中に収めます。今回は、佐竹氏掌握後の保内地域の武士（保内衆）を統括した佐竹南家を紹介します。

保内が佐竹氏の支配下に入った頃の佐竹氏当主は、義篤でした。義篤は弱冠十二歳で当主となったため、家中がまとまらず、その統制に苦しみました。そこで、自身の弟を分家させ、久慈川流域地域を統括させました。現在の常陸大宮市中心部を担当したのが部垂義元、保内地域を担当したのが南義里（よしさと、初めは義隣）でした。義里は、佐竹の本拠・太田城下の南部に屋敷を構えたことから、南家を称し、同じく佐竹氏一族の東家・北家とともに、佐竹氏の外交・政治・統治を支えました。

義里の兄部垂義元は、佐竹氏へ反乱を起こし、天文九年（一五四〇）に討死してしまいますが、義里は終生佐竹氏当主を支えます。佐竹義篤は保内を掌握後、北は白川領、西は那須領へ進出していきますが、対白川氏・那須氏の外交を支えたのが南義里でした。白川氏に対しては、①天文八年から九年頃に現棚倉町の八槻都々古別神社に通行許可を依頼、②天文十年の佐竹氏と白川氏との和議締結のための外交、③天文二十二年頃に新しく佐竹氏領となった南郷地域下郷（現矢祭町・塙町）の惣検地の実施、那須氏に対しては①那須氏前当主政資の葬儀の際の香典の送付、②那須氏の内紛への介入のために派遣された佐竹方武士に対する軍事行動の指示を行ったことが確認できます。

このように、政治・外交方面で幅広い活躍を見せた南義里でしたが、佐竹一族から分家して南家を創出したため、譜代の家臣はいませんでした。そこで、義里家臣として付けられたのが、石井氏・根本氏・荒巻（蒔）氏などの保内に拠点を置く武士たちでした。とりわけ、黒沢城主となった荒巻氏は、南家の重臣となり、その外交・統治を支えることとなりました。

南家初代の義里は跡を継ぐ子供が無く、佐竹氏当主義昭（義里の甥）の子義尚が養子となり、幼年のまま二代目を継ぎました。しかし、元亀二年（一五七一）にわずか二十二歳の若さで病死します。その後、義尚の子・義種がまだ幼い年齢で、三代目として家を継承します。このように南家は幼年の当主が続き、次第に佐竹家中での影響力を失っていきます。しかし、元亀四年八月七日に、下野宮近津神社に奉納された鐘の銘文には、大檀那として佐竹氏当主義重とともに「南鶴寿丸（義種の幼名）」の名前が見え、地域社会からは当主が幼年ながらも南家が保内地域の担当者であるとの認識をもたれていたようです。同じ銘文の中には「根本内蔵助」や「荒蒔駿河守為秀」等保内在住の南家家臣が名を連ねており、保内衆が支える形で、南家による保内の統治が続けられていたようです。それでも南家の影響力低下は止まらず、戦国時代後半になると、佐竹氏の保内地域担当は、南家当主義種から東家当主義久へと変わってしまいました。

こうした変遷をたどった南家も、慶長七年（一六〇二）の佐竹氏の国替に伴い、秋田へと移っていきます。この時、荒巻氏ら南家家臣も、当主義種と行動をともにしました。秋田移封後の義種に与えられた所領は、秋田南部にある湯沢でした。義種によって湯沢城を中心に城下が整備され、そこに南家家臣の武家屋敷が並びました。享保十三年（一七二八）に描かれた「湯沢絵図」（秋田県公文書館所蔵）を見ると、湯沢城下には荒巻・石井・生田目・御代など、保内由来の名字が見られます。南家家臣となった保内衆の子孫は、秋田湯沢にその血脈をつなぐことになりました。（藤井達也）

懐かしき昭和の大子（五）

○奥久慈グランドホテル（昭和四十二年頃）

奥久慈グランドホテルは、老舗旅館三美亭の系列ホテルとして、昭和四十二年（一九六七）、久慈川と押川の合流点に隣接する場所に開業した。鉄筋コンクリート造り三階建てで、二十二の客室、百十畳の大広間、大浴場などを備えていた。昭和五十一年に、鉄筋コンクリート造り七階建ての新館が増築された。新館は、大子町最大の高層建築物であり、久慈川と押川の合流点という立地と相まって町のランドマークとなった。しかし、平成十二年（二〇〇〇）に、不況による経営難と後継者の不在により廃業した。跡地は競売にかけられるも買い手がなく、建物は放置され、平成十六年にはボヤ騒ぎが発生した。大子町は、景観の悪化を憂慮し、平成十七年に跡地を購入し、その後、建物を取り壊して湯の里公園を整備した。

（大金祐介）

大子町歴史資料調査研究会では、明治・大正・昭和期の写真や絵葉書を探しております。お見せいただける方は、大子町教育委員会事務局生涯学習担当までご連絡ください。

編　集　大子町歴史資料調査研究会
編集人　藤井　達也（大子町歴史資料調査研究員）
大金　祐介（大子町歴史資料調査研究員）
小松崎　研（大子町歴史資料調査研究員）
山崎　仙一（大子町教育委員会事務局）
大金真理子（大子町教育委員会事務局）
発　行　大子町教育委員会
久慈郡大子町大字池田二六六九番地
☎０２９５（７２）１１４８
発行日　二〇二五年（令和七）六月一日